

日曜講談・後の豊臣（奈良大学所蔵上方講談資料解題）

Noti no Toyotomi : A Note of Source of *Kamigata Kodan*(Historical Narratives of Osaka Area)

森田 意司*

Kenji MORITA

1 奈良に関わる講談

平成4年度、5年度の文学部プロジェクト研究において、筆者は奈良、大和を舞台とした講談資料を調査収集してきた。この作業の最終的な目標は、それらの作品に見られる庶民の視点での大和像を追跡しようとするところであるが、そこに到達するには、まだまだ時間をかけた調査が必要であると考えている。ここでは、これまでに調査することのできた奈良に関係する上方講談資料の中から、「日曜講談・後の豊臣」を紹介したい。なお、奈良大学図書館における奈良関係資料の収集の一部として、奈良に関係する講談資料の収集は継続されており、この文中で触れた資料のうち、原本、もしくは複写によって奈良大学図書館に所蔵されている講談関係資料については、利用の便を考えて分類番号を付記しておいた。

ところで、奈良を舞台とした講談といっても、題名によって明らかにそれとわかるもの、つまり、タイトルに「奈良」、「大和」といった語が含まれていたり、「壺坂霊験記」、「中将姫」、「良弁杉」のように奈良との関わりが周知のもの^①、あるいは、大和を出身地とする人物が活躍する講談であれば^②、それが奈良に関わる講談であることは明らかである。しかし、他の多くの場合は、「義士伝」のように奈良との関係がないことが明瞭なものを除くと、それぞれの速記本にあたって調査するほかはなく、所蔵機関が限定されていることもあって、作業はなかなか進まないのが現状である。とくに武芸関係の演目には、諸国漫遊のネタが多く、その途中で奈良に足を延ばしたものなどについては、十分な調査を行なうことは容易ではない。

しかし、一方では、こうした調査に有用な工具書も最近では出版されるようになってきた。これまでは、個々の講談演目の梗概にまで及んでいる文献としては、昭和63年から『講談研究』に連載中の保田武宏氏の「講談放送史」（平成8年8月で99回）が、放送された演目について粗筋を紹介しておられるのが利用できるくらいしかなかった。ところが、最近になって、これまで新聞資料の集成をはじめとして多くの労作を出版され、講談史の研究に多大の功績を上げてこられた吉沢英明氏が、『講談明治期速記本集覧』（平成7年、編者刊、779.1 Y94）を編纂され、解題の中に出版の経緯などの資料として、発端や末尾を引用される箇所が多く、それに

平成8年8月30日原稿受理 *文学部史学科

よって演目の具体的内容の一端なりとも知ることができるものが多くなった。さらに、明治期に刊行された上方講談の速記本については、旭堂小南陵氏（三代目、以下同じ）による『明治期大阪の演芸速記本基礎研究』（平成6年、たる出版、779.1 Ky4）の刊行によって、書名をはじめとする書誌事項に関しては、その大部分を知ることができるようになった。おかげをこうむって、調査の作業は幾分なりとも前進するようになってきており、今回の文章に関しては、これらの労作に拠ることが多い。

もちろん、講談の速記本が忠実に高座での口演を記録しているものではないことは言うまでもない。『西国三十三所観音霊験記』の第一篇『壺坂の澤市』（明治35年、中川玉成堂、779.12 Ka51）の開口一番に、神田伯龍は次のように述べる（書く）。

今回ご所望によりまして観音霊験記と題し開講に及びます次第でございますが、これは吾々講談師輩の中余程熱心に信仰致す者が一兩人ありまして、これまで伺ひ来たりましたる講談にございます。併し伺ひまする吾々より、お聞取りになりまする諸君の方が詳しく御存知のことゝ相心得ます。併し高座に掛けますのと、かく書物に著しまするとは、少しく相違もございます。

つまり、速記本とはいうものの、書き講談としての性格を持ち合わせているのである。当時の回想を読んでも、速記といっても、釈場での口演をそのまま筆録するのではなく、料理屋の座敷に速記者と講談師を呼んで、語ったものを筆記するのであり、しかも、その筆記に速記者などが手を入れるから、速記本そのものが、「書き講談」としての側面を有していると言える⁹⁾。とはいっても、やはり速記本があるおかげで今日でも講談の実作が見ることができるわけであるから、貴重な資料であることに変わりはない。

2 難波戦記と日曜講談・後の豊臣

ここで取り上げようとする「後の豊臣」は、三代目旭堂南陵氏により、大阪の夕刊紙『新大阪』に、昭和47年5月1日号から、48年8月6日号まで連載されたもので、その複写を合本したものが、本学の図書館に所蔵されている（913.7 Ky4）¹⁰⁾。南陵氏は、この当時、「日曜講談」と題して同紙に講談を文章化したものを連載しており、「後の豊臣」の前は、「猿面秀吉」と題して「太閤記」を、また終了後は、引き続いて「女の天下」と題して、千姫の話、宇都宮の釣天井を経て、大久保彦左衛門へと連載は続けられた。掲載は週1回で（日付は月曜、実質は日曜）、漫画風のカットが入っている（作者不明）。明治の「速記本」が、速記と名乗っていても、「書き講談」としての側面があるように、その後の「長編講談」、「講談雑誌」の類を経て、講談と「書くこと」との距離は近く、本書も1つの例といえる¹¹⁾。

さて、この「後の豊臣」が取り上げているのは、大坂冬の陣、夏の陣における、豊臣・徳川の戦いで、大坂落城、秀頼の薩摩落ちで話が終わる。これは、「難波戦記」という題目で演じられてきた上方講談旭堂家のお家芸であり、「太閤記」、「水戸黄門」とともに、三大演目の1つとされてきたものである。後述するように、「難波戦記」には明治時代の速記本が存在するが、現在の上方講談において旭堂家が上演している「難波戦記」に関しては、この「後の豊臣」

が、文体をもふくめて実演にかなり近い形となっており、現行の「難波戦記」の文章化として、上方講談資料としての価値を有する。もちろん、テープレコーダーをはじめとする、AV機器の存在によって、実演そのものが保存されるようになった現在、こうした文字化資料の価値は相対的なものになったと言わなければならないが、「難波戦記」は、この連載が67回にわたっていることから知る事ができるように、かなり長編の演目であり⁽⁶⁾、特定の部分に関しては、しばしば上演される人気演目であるものの⁽⁷⁾、最近では続き読みが行われた例を知らないもので、その点からも有用な資料である。

時代をさかのぼって見ていくと、この演目のもとになるものとしては、すでに江戸時代に軍記小説である、「難波戦記」が存在し、多くの写本が伝わっているし（著者は、万年頼方、二階堂行憲とされる⁽⁸⁾）、徳川氏に対する禁忌が無くなった明治時代には、ポール表紙本などの形で出版されている他、三十巻本に拠った活字化が、『通俗日本全史』の第11巻（大正3年、早稲田大学出版部、210.1 W41 11）に収められていて、容易に目にすることができる⁽⁹⁾。

また、同じく江戸時代に成立した小説に、この話の主役とも言うべき真田幸村を含めた、昌幸、幸村、大助三代が主人公である「真田三代記」があり⁽¹⁰⁾、こちらも明治に入って多数の活字本が出ている⁽¹¹⁾。そのうち、身近なものとしては、『帝国文庫』第18篇（昭和4年、博文館）に収められたものがある。さらには、戦前の書き講談の代表的作品である「立川文庫」には、後で引用する『智謀真田幸村』をはじめ、「大坂城冬陣」、「大坂城夏陣」の2篇があり、猿飛佐助、霧隠才蔵、塙田右衛門といった人気の主人公達は、「難波戦記」の世界の住人であり、当時の各種の「文庫」には、個別の物語も単行化して収められている⁽¹²⁾。

さて、講談の速記本であるが、上方講談では、多くの速記本を残した神田伯龍の口演の速記本が、「難波戦記」についても存在し、大阪の博多成象堂から、『片桐且元』（後『前難波戦記』と改題）、『難波戦記』、『難波戦記冬合戦』、『難波戦記夏合戦』、『難波戦記後日談』、『難波戦記真田大助』の6巻となって出版されており（明治32年から36年、『難波戦記』のみ本学所蔵、913.7 Ka51）、東京の放牛舎桃林（島左右助）の『徳川豊臣大坂冬御陣』（明治30年、出版者の瀧川民治郎は、「夏御陣」の金桜堂と同一人物）、『徳川豊臣大坂夏御陣』（明治30年、金桜堂）もある⁽¹³⁾。一方、「真田三代記」についても、速記本としては、二代目旭堂南陵のもの（明治36年、博多成象堂、全6冊）と、松林伯知のもの（明治30、31年、金桜堂、全6冊）の2種が存在する（ただし、南陵のものは、「上田籠城」で終わり、大坂冬夏の陣には及んでいない）。なお、吉沢氏の書誌によれば、この物語に関連する可能性のあるものとして、この他に宝井琴凌の『真田幸村伝』（明治29年、日吉堂）があるということであるが、筆者は未見である。また、この時代、講談の速記が新聞に連載されたり、別冊付録として付けられることが多く、これについても吉沢氏はいくつかの書名を挙げておられるが、筆者の見得たのは、本学所蔵の『神戸又新日報』附録の桃葉濟桐里の『難波戦記智勇の名将』（大正5年、913.7 To 92、吉沢氏目録未載、ただし大阪入城以前のみ）と『北国新聞』附録の松林伯知の『真田三代記』（国立演芸場資料室所蔵、刊年不明、吉沢氏目録未載、ただし冬合戦で終わる）のみである。

ところで「後の豊臣」、すなわち「難波戦記」全体としては、大坂落城を中心とする軍談であり、直接的には奈良とはつながりが無い演目であるが、合戦の過程で、奈良に関する話題が2回出てくる。「般若寺の焼き討ち」と、「法隆寺の焼き討ち」の2ヶ所である。その点で言えば、極めて部分的な奈良との関係であるが、旭堂家のお家芸としての性格をもつことや、「般若寺焼き討ち」が、難波戦記のうちでも、あるいは奈良に関係した講談の中でも、最も多く上演されるものに数えられるので、ここで検討することとしたのである。

ただし、「難波戦記」にせよ、「真田三代記」にせよ、写本によって伝来したものであり、個々の本によって内容に違いが生じているのは当然であるが、ここでは、江戸時代の小説としての「難波戦記」について論じることを目的とするわけではないので、こうした写本における差異に関して検討を加えることは用意していない。速記本が作られ、文字の形で講談を検討することが可能である明治期、あるいはそれ以降に出版された、しかも筆者が見ることができる範囲にあった諸本について、これらの話がどう表現されているかについて検討を加えたに過ぎない。さらにこれまた言うまでもないことだが、ここで行う作業においては、史実との関係について云々するつもりもない。あくまでも上方講談研究のための資料としての意義と、そこから読むことができる特徴を考えようとするものである。なお、「般若寺の焼き討ち」と「法隆寺の焼き討ち」の歴史上の事実に関しては、関連する史料が、『大日本史料』にまとめられており、「般若寺」が第12編之16（慶長19年11月15日）、「法隆寺」が同じく第12編之18（元和元年4月27日）に見える。もっとも、「般若寺」については史実ではないから、同日の家康の奈良入りについての史料である⁽⁴⁾。また、「法隆寺の焼き討ち」と筒井正次の切腹については、『奈良市史』通史3（昭和63年）、『大和郡山市史』（昭和41年）などにも叙述されている。

3 般若寺の焼き討ち

「般若寺の焼き討ち」は、冬の陣の話で、慶長19年11月15日に大坂攻めのために伏見から奈良街道を経て大坂へ向かった徳川家康が、その夜に宿泊した般若寺で真田幸村の仕掛けた地雷攻めに会い、幸村や薄田隼人に追い詰められるが、間一髪で奈良の町まで脱出し、さらに桶屋の三右衛門の機転で救われるという話である。焼き討ちの場面における修羅場を含んだ軍談と、逃走の場面のチャリがかった面白さがうまく組み合わせられていて、しばしば演じられるのも無理はない。また、この話に並行して、同時に京都を出て淀川沿いに大坂をめざした秀忠が、やはり真田幸村の仕掛けた地雷に会い、枚方の船頭に救われるという話がある。これが「くらわんか船の由来」で、これもまたしばしば上演される演目である。なお、「後の豊臣」では、ようやく難を逃れた家康と秀忠とは京へ逃げ戻り、無事を喜びあうことになっているが（伯龍の速記本も同じ）、多くの本では、奈良へ逃れた家康は、翌日は法隆寺に泊まり、その次の日に住吉へ入って、大坂冬の陣が本格的に始まることになっている。

まず、速記本をはじめとするさまざまな材料におけるこのくだりの差異について、まとめておこう。そもそも、明治時代の活字本を含めて筆者の見ることのできた「難波戦記」の諸本の中では、伏見を発進した家康は、途中木津で休息した後、奈良に安着したことにあって、

襲撃の話はなく、史実と合致する。たとえば、『通俗日本全史』では、

今日木津に着御ありて、名主の家に御旗を立てられ、暫く御陣を取らる、爰に於て供奉の輩鎧を脱ぎ、過半野陣を取り、此所にて御湯漬を召上らる、俄に奈良へ御出馬なされしに、
《中略》 前將軍家木津着御の砌りは御供の面々僅か五十騎に及ばず、御跡より次第次第に追付き奉りける程に、頓て大勢に成って、申の下刻に奈良に着かせ給ふ、其夜は中坊左近が宅に御止宿あり、観世宗説脇話にて延命喜四郎入道御前に出で、御能申上ぐ（巻七・両將軍家京都伏見御出陣の事）

とあって、引用で中略した部分に、下男の中に紛れこんでいた不審の人物を捕らえた話はあるものの、幸村による襲撃の話は全く見えない（秀忠についても同じ）。

これに対し、「真田三代記」においては、写本は見ることができなかったが、明治期の活字本で見るかぎり、襲撃の記事が、それもかなり長文で存在する（帝国土庫本第4編第12・幸村文殊院大門坊焼討の事、幸村一騎大御所を襲ふ事）。そして、『帝国土庫』をはじめ、筆者の見得た本においては、いずれも、「文殊院大門坊」に宿泊の家康を幸村が襲撃し、同志討ちを起こさせたことになっている。家康はかるうじて脱出したが、幸村に追い詰められ、奈良へ逃げて桶屋にかくまわれたとある。

では、講談の速記本ではどのようになっているのか。神田伯龍の『難波戦記冬合戦』では、「木津の文殊院」に宿泊した家康が襲われ、脱出したが落馬し、背負われて奈良へ逃れるあたり、「後の豊臣」に一致する。ただし、明治33年刊行の本では、「木津の文殊院」とあるのが、同じ伯龍の大正2年刊行の本では、「木津の内裏島」となっている（この部分、地名を除いては全く同文と言ってよい、なぜ地名だけが変わったのかは不明である）。また、『北国新聞』連載の松林伯知の『真田三代記』は、「文殊院大門坊」を踏襲するが、幸村は薄田隼人に命じて、「般若寺」付近で待ちぶせさせている⁽¹⁵⁾。ちなみに放牛舎桃林の『徳川豊臣大坂冬御陣』には、この話はなく、上引の「難波戦記」の内容を要約した表現になっている⁽¹⁶⁾。

大正以後になると、「立川文庫」をはじめとする各種の文庫、さらには「長編講談」などと称した「書き講談」が、主流となるようになる。こうした書き講談における、「般若寺焼き討ち」については調査が行き届いてはいないが、「立川文庫」の『智謀真田幸村』（明治44年）においては、木津の豪族三好三左衛門宅に宿泊した家康が襲われるという話になっている。内容は、地雷火によること、薄田隼人が追撃することなど、かなり「後の豊臣」に近い⁽¹⁷⁾。ただし、桶屋に匿われる話はあるが、背負われて逃げる話はない。『智謀真田幸村』の作者は、奥付には加藤玉秀となっているが、これは上方講談師の二代目玉田玉秀齋のことである。伯龍、玉秀齋と、上方講談の系統では、「後の豊臣」に近い話が成立していたといえよう。

しかし、以上で見たように、筆者の見たかぎりでは、「般若寺」で焼討ちがあったとするものではなく、「立川文庫」でも木津の話であることに変わりはない。この事をどう考えるかが問題なのだが、これについては5で触れる。

4 法隆寺の焼き討ち

次に「法隆寺の焼き討ち」を見てみよう。この話は夏の陣に属するもので、「難波戦記」、「真田三代記」ともに取り上げているものが多い。冬の陣の際に大坂方を裏切った大工の棟梁中井氏（大和守）を追って、塙団右衛門が中井氏の領地のある法隆寺へ攻め込んで焼き払い、あわせて筒井氏の郡山城を焼き討ちし、城主筒井正次は責めを負って切腹したという話である。冬の陣の和睦が破れ、立場が悪くなった大野主馬介治房が挽回を期して起こした戦さに副将としてつきあわざるをえなくなった団右衛門に、幸村が授けた作戦とされる。もちろん、歴史的にみれば、この戦さで法隆寺そのものが炎上した事実はないことは、さきに示した『大日本史料』所収の史料によっても明らかである⁽¹⁸⁾。こちらの演目は、最近では上演されたという話は聞かない。はじめにも書いたように、「後の豊臣」は今日旭堂家で演じられる内容と比べて表現に至るまで一致しており、その点で貴重な資料なのであるが、それとともに、もちろん読み物として全体の筋が通るように書かれているから、現在ほとんど上演されない箇所もこの連載には含まれている。この法隆寺の焼き討ちなどはその例と言えよう。そして、江戸時代の「難波戦記」では、法隆寺炎上の場面は詳しく描写されているのに対し、「後の豊臣」では、法隆寺は焼失を免れたとしている。この問題についても、5で取り上げる。

5 小結：講談における固有名詞

焼き討ちやその後の逃走はともかくとして、「木津」という地名そのものは史実と一致しているのが、「般若寺」に変わったことに、筆者がこだわっていることに対して、史実を離れた架空の物語の、しかも単なる一挿話中の固有名詞に関して、このように多弁を連ねることは無意味と考えられるかもしれない。まさに、「講談師見てきたような嘘をつき」の世界ではないかと、批判されるであろう。しかし、すでに前論で触れたように講談の特性の1つは、「固有名詞性」にある⁽¹⁹⁾。すなわち、多くの落語においては、長屋の八つぁん、熊さんといった一般的な名前の人物が活躍するのに対し、有名無名は別として歴史上存在した「固有名詞」を有する人物が活躍するところに、講談を講談たらしめる点の一つがあるのである。したがって、現行本に見られるある固有名詞が、どのようにして成立したかという問題は、その作品がどのように受容されたかを考える1つの材料となりうるのである。

この「固有名詞性」は、話中の固有名詞の安定性を意味してはいない。むしろ、逆に演じられる場所によって聞き手にシンパシーを感じさせるように、固有名詞はアレンジされるのである（森田前論参照）。講談が語りの芸能である以上、目の前にいる聞き手の感情を意識して形成されていくのは当然であり、相手のシンパシーをどのように呼び起こすかが問題となる。固有名詞に限らず、このシンパシーという問題は、話の構成にも大きな影響を与えるし、登場する人物への聞き手のシンパシーの欠如が、上方講談の現状にも関わっていることについては、これもすでに述べた。例えば、註7でも触れたように、「難波戦記」には、現在でもしばしば上演される演目があるが、その多くは冬の陣の話で、夏の陣で目立つのは「平野の地雷火」くらいのものである。これは、冬の陣が豊臣方の優勢で和睦となったとされるのに対し、夏の陣

は大坂落城の物語であり、主人公とも言うべき豪傑達の討死の場面が多いことにも、豊臣びいきの大阪の講談としては影響されているのであろう（三代目南陵氏もこの点を肯定されている）。夏の陣で唯一しばしば上演される「平野の地雷火」は、一説には家康はこの時に死んだとされる程の（この話が入れ事として入るのが通例である）、幸村の知謀による大坂方の大勝の話であり、いわば例外的な話である。

話を般若寺と法隆寺に戻そう。『真田三代記』の「文殊院大門坊」は、現在の時点では、消滅したか、あるいは少なくともほとんど無名の地名である。伯龍の速記本に見られる「木津の内裏島」も分からない。こうした地名が、奈良坂に現存する寺院である般若寺に変えられたのには、この寺院が奈良坂越えて京から奈良へ入る要衝にあり、戦闘の場としてふさわしいこと、「三代記」では、薄田隼人が寺に隠れていたこと、そして文殊菩薩の寺として有名なことから、「文殊院」からの連想がはたらいたなどの理由が考えられるのは言うまでもない。そして、それとともに、「般若寺」という名前が、現実に存在する地名として、大阪の読者にシンパシーを抱かせるものであったゆえに、何時の頃に実演者によって、この名前がはめ込まれたのであろう。

法隆寺の場合はどうか。史実において焼失がなかったことは言うまでもないとしても、大阪の読者の持つシンパシーという点から見れば、近代における日本文化の再発見の中で重要な位置を占めることになった法隆寺を、大坂方が焼き払うわけにはいなくなってしまうことが、焼失が消えた理由の一つなのではないか⁽²⁰⁾。実を言えば、前近代においても、太子信仰の対象であった聖徳太子の寺である法隆寺の焼き討ちは、負のイメージを喚起する話であったはずである。だからこそ、徳川方の立場に立つと言われる「難波戦記」の諸本においては、法隆寺炎上のありさまを詳しく描写し、「彼の所に放火し、僧俗男女を斬殺し、突殺しけるこそ無慙なれ」と結ぶのであろう⁽²¹⁾。

くりかえすが、架空の世界の地名の話ではある。しかし、この問題を検討することは、固有名詞から講談の受容について見ていくための一つの材料を提供してくれるのである。こうした作業をさらに進めるには、大正以降になって主流となる書き講談、あるいは大坂の陣をテーマにした大衆文学において、この地名がどう扱われたかの追跡がさらに必要かもしれない。あるいは、講談「難波戦記」全体の固有名詞について考察する必要もあろう。もし、機会を得れば、これまで検討されることのなかった上方講談におけるこうした問題について再度考えてみたい。

註

- 1 「壺坂靈驗記」については、二代目旭堂南陵の速記本を奈良大学では所蔵しているが（大正9年 国華堂 779.12 Ky4）、その他、これらの演目は、いずれも『西国三十三所観音靈驗記』の一部として語られる場合もあり、後でも引用する神田伯龍の速記本を奈良大学は所蔵する（1のみ779.12 Ka51、2、3は、913.7 Ka51）
- 2 例えば曾呂利新左衛門は、奈良の三輪の出身とされる。曾呂利新は、上方講談では比較的多く取り上げられる演目であるが、現行の「曾呂利新左衛門」では、曾呂利が三輪での幼少時代に起こした騒動を発端としている。これは、旭堂小南陵氏の文字化によるものであり（二代目南陵の速記本を底本とする）、最近では、旭堂南太平洋氏がこの台本によって講じている。この現行台本では、村を出た曾呂利が堺の鞍師目口三大夫に出会い、弟子入りしたことから、堺の人としての曾呂利が始まることになる。なお、「立川文庫」の『太閤と曾呂利』には、大和出身の話はない。

- 3 速記本製作の様子、書き講談としての「立川文庫」の出現の過程などについては、足立巻一氏の「立川文庫誕生の背景」（『解説立川文庫』〔復刻版立川文庫〕所収、昭和49年）や『立川文庫の英雄たち』（昭和55年、文和書房、023.1 A16）が、比較的まとまっている他、当事者である池田蘭子氏の小説『女紋』がある。
- 4 旭堂小南陵氏によれば、それ以前にも二代目南陵が、夕刊紙『新関西』もしくはその前身『ニュー関西』に連載しており、切り抜きも存在するとのことであるが、未確認。
- 5 戦後、現南陵氏に多くの雑誌から講談の寄稿依頼があったことについては、同氏が『上方芸能』に連載した「明治の上方講談師」に見える。
- 6 実際には、この連載2、3回分で、30分の講談1回になる。
- 7 『難波戦記』のうち、最近でもしばしば上演される演目には、
荒大名の茶の湯、真田の入城、大助初陣、般若寺の焼き討ち、くらわんか船の由来、槍摺りの鑑、
村越茂助、平野の地雷火
などがある。
- 8 『難波戦記』、『真田三代記』については、これまでに専論があることを寡聞にして知らない。参考文献として有用なものとしては、中村幸彦氏が執筆された『日本古典文学大辞典』の、「難波戦記」、「難波戦記物」、「真田三代記」などの項目を挙げることができよう。
- 9 奈良大学には、江戸時代のものと考えられる『難波戦記合解評林』と題する写本（10冊、913.5 N48）と、明治18年に東京の西村富次郎によって刊行された『増補難波戦記』（913.5 N84）、19年に大阪の和田奈良吉によって刊行されたやはり『増補難波戦記』（913.7 W12）を所蔵している。
- 10 『国立国会図書館蔵書目録明治期』第6巻文学（平成6年）によれば、同館だけで「真田三代記」を題名とする明治時代の刊行物を、講談の速記本を除いて14種所蔵している。
- 11 「真田三代記」については、最近、矢代和夫氏の『真田三代記』（平成8年、勉誠社）が出版され、帝国文庫本によって、第5編、すなわち夏の陣の部分が口語訳されている。
- 12 『解説立川文庫』所収の「立川文庫刊行一覧」による。なお、本学にも、「大正文庫」の『難波戦記』があるが（大正3年、駿々堂、913.7 Ts63）、冬合戦の開戦で巻が終り、ここで問題とする部分はない。同書の巻末の広告には、『難波戦記冬合戦』、『難波戦記夏合戦』の2冊の名が見えるが未見。
- 13 ただし、『徳川豊臣大坂夏御陣』については、奥付の出版日が、国立演芸場資料室所蔵本は4月7日、国会図書館蔵本は4月11日と異なっており、両本が同一本かどうか疑問が残る。
- 14 ちなみに、この時期の般若寺は、永禄10年（1567）の松永久秀の戦いで、堂宇のほとんどを失っており、再建されるのは江戸時代の寛文7年（1667）になってからのことである。般若寺の寺史については、『大和古寺大観』第3巻、『古寺巡礼奈良』第5巻の同寺についての解説を参照のこと。執筆はいずれも工藤良任氏。
- 15 同じ松林伯知でも、金桜堂から刊行された速記本では、般若寺の焼き討ちには触れていない。
- 16 家康公は諸将の責め口をお定めあって其の夜即ち十一月十五日の晩奈良に至らせられ中之坊左近が方に御止宿あり
- 17 講談社による復刻本による（昭和49年、『復刻立川文庫傑作選』、913.708 Ta14 5）。
- 18 高田良信氏の「法隆寺元禄出開帳への道」（「法隆寺秘宝展」図録所収、サントリー博物館、平成8年）には、冬の陣に際して、豊臣方からの大和国半分と引換えに豊臣方につくことの申し出を、法隆寺が断ったことに由来し、寺の西側の村に火が放たれたが、寺僧たちによって防がれたとある。
- 19 森田憲司「上方講談の現状」（『奈良大学総合研究所所報』2、平成6年）参照。
- 20 明治以降の、世界最古の木造建築、東西文化交流の精華としての法隆寺像をめぐる問題については、井上章一氏の「法隆寺への精神史」（平成6年、弘文堂、521.81 I57）を参照。
- 21 すでに指摘されていることであるが、「難波戦記」に比べて、「真田三代記」の方が、大坂方に対して同情的である（中村幸彦『日本古典文学大辞典』「真田三代記」）。具体的な例として、最終巻を見てみると、「難波戦記」の方は、たとえば『通俗日本全史』で活字化されている三十巻本では、三代家光の上洛、武家諸法度の発布で終わっており、「当家、数代太平なること、和洋の歴代よりも、御当家のまされること、万巻の書に見えたり、干戈を袋にして、文学を以て国政を行わるる事、夫の堯舜の世にも超えつべし」と、徳川による天下統一と天下泰平の賛美で終わる。これに対し、「真田三代記」の方は、大坂落城の際に脱出した秀頼一行が、薩摩へ落ち延びることになっている。講談の方は、「難波戦記」、「真田三代記」とタイトルは変わっても、最後に薩摩落ちで終わることは同様である。